

施設実習における評価の“ズレ”の分析

久松 尚美 佐々木 昌代

Analysis of Discrepancies found in the Evaluation of Training Programs in Welfare Facilities

Naomi HISAMATSU Masayo SASAKI

I 問題と目的

近年の子どもを取り巻く社会情勢の大きな変化に伴い、保育所をはじめとするその他の福祉施設に期待される機能、及びそこで勤務する保育士に対するニーズは、年々複雑化、多様化してきている。児童虐待の増加が社会問題となって久しいが、児童養護施設に入所する児童においても、被虐待児の占める割合の増加が著しい。また、社会的養護を必要とする児童においては、障がい等のある児童が増加しており、2008年の調査では、児童養護施設に入所している児童のうち、障がいのある子どもの割合は23.4%となっている（厚生労働省、2009）。児童養護施設において、入所する被虐待児の増加及び障がいのある子どもの増加が見込まれるなかで、子ども達への対応として、社会的養護の量・質ともに拡充が求められている。久松・野坂（2014）は、宮崎県内のB児童養護施設における調査において、全国集計53.4%をはるかに上回る73.3%の児童が被虐待経験を有していたこと、また、乳児院からB児童養護施設への措置変更児童数の多さを全国との比較によって示した。さらに、全国集計を23.4%も上回る62.2%の児童に何らかの障がいがあり、うち発達障がい42.2%と高い割合を占めていることも明らかとなった。

以上のように児童養護施設を例に挙げてみても、入所する児童の援助、及び児童の保護者に対する支援に際して求められることなど、施設職員として必要とされる専門性は多岐にわたることが想定される。

このような施設の厳しい現実に対応すべく、専門性を深める授業と実習事前事後指導の充実が求められることとなるが、実習前指導の内容として、実習に臨むにあたってのマナーや最低限のルール、実習を成立させるための基本的な事項の確認に力を注がざるを得ない現実がある。また、事前事後指導のあり方として、本学では210名以上を一斉授業という指導方法で行わなければならない、学生一人一人の思いを受け止める機会や成長したという実感を、実習担当教員が持ちにくいことも問題点として挙げられる。この問題点を補う重要なデータとなるのが「評価票」及び「自己評価」である。

これらは、単に実習の評価のためのデータにとどまらず、実習の振り返りや今後の課題を見いだす指標となり、事後指導の充実を図るものとなる。

そこで本調査では、保育実習I b（施設実習）における「評価票」（実習先による学生評価）及び「自己評価」（学生自身による評価・振り返り）に着目し、双方の“ズレ”から今後の実習指導の課題や改善すべき点を見いだすことを目的とする。

Ⅱ 方法

1. 調査対象者

保育士資格取得を希望し、「保育実習Ⅰb（施設実習）」を履修したM短期大学保育科平成25年度入学者を対象とした。

- 平成25年度入学者

実習期間：平成26年度夏季休業期間

実習先：42施設（乳児院1，児童養護施設・児童自立支援施設10，障がい児・者施設31）

履修者：210名（211名履修したが実習期間を変更した者を除いた。）

2. 調査対象

平成26年度保育実習Ⅰb「評価票」（実習先による学生評価）

平成26年度保育実習Ⅰb「自己評価」（学生自身による評価・振り返り）

項目は以下の通りである。

- Ⅰ. 出勤状況について（欠勤・遅刻・早退の日数と，連絡，補充について）
- Ⅱ. 実習態度・日誌についての7項目（表1. に示す）を3件法で評価
- Ⅲ. 実習内容についての9項目（表2. に示す）を5段階で評価

また，以下に示す前年度の保育実習Ⅰb（施設実習）を比較対象とした。

- 平成24年度入学者

実習期間：平成25年度夏季休業期間

実習先：40施設（乳児院1，児童養護施設9，障がい児・者施設30）

履修者：186名（188名履修したが疾病や実習期間を変更した者を除いた。）

Ⅲ 結果及び考察

1. 評価票と自己評価との比較

【1】実習態度・日誌について

実習態度・日誌について評価の平均を表1. 評価の対比を図1. に示す。

自己評価と評価票のズレが大きいのは，Ⅱ-④「勤務態度」，及びⅡ-⑦「日誌の誤字・脱字」であった。いずれも自己評価よりも評価票の方が高くなっている。また，評価票の方がわずかに高くなっているものとしてⅡ-③「言葉遣い」，Ⅱ-⑥「日誌の提出期限」，が挙げられる。以上の4つの評価項目において学生は事前指導で確認した実習に臨むにあたっての最低限のマナーを自覚し，謙虚に自己評価を行ったものと思われる。他方，自己評価が最も高く，評価票よりも上回ったのはⅡ-⑤の「指導・助言を受ける態度」であった。現場における具体的な場面に即してのことであり，その都度指導や助言を受けることで，学生にとっては受け身の姿勢ではあるものの「学んだ」と捉えやすいことが要因と考えられる。

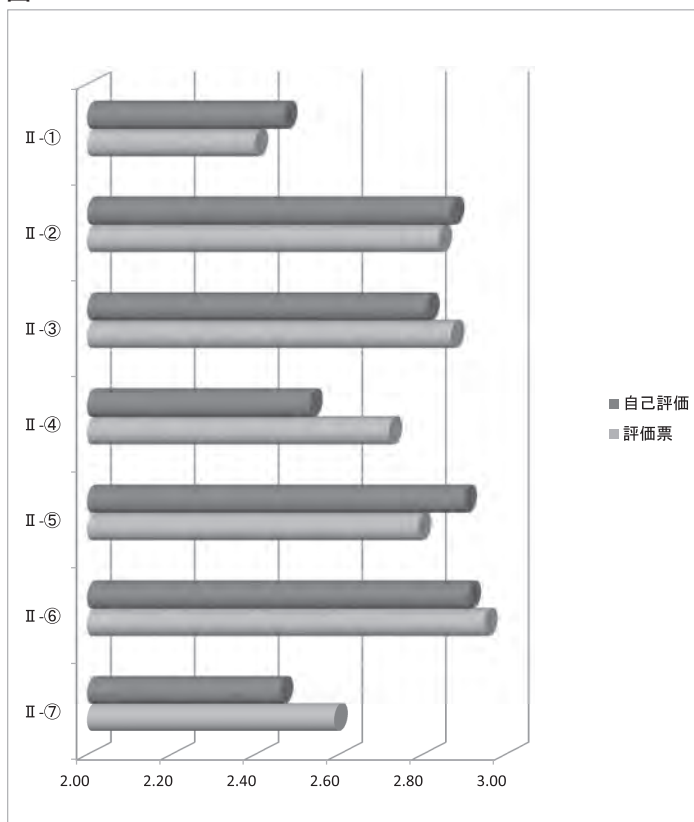
【2】実習内容について

実習内容についての評価の平均を表2. 評価の対比を図2. に示す。

表 1

評価内容	自己評価	評価票	評価内容
Ⅱ - ①	2.47	2.40	出勤時刻 (30 分前)
Ⅱ - ②	2.87	2.84	挨拶や服装
Ⅱ - ③	2.81	2.87	言葉遣い
Ⅱ - ④	2.53	2.72	勤務態度
Ⅱ - ⑤	2.90	2.79	指導・助言を受ける態度
Ⅱ - ⑥	2.91	2.95	日誌の提出期限
Ⅱ - ⑦	2.46	2.59	日誌の誤字・脱字

図 1



すべての評価項目において自己評価が評価票を上回る結果となった。特に突出して自己評価が高いのは、Ⅲ - ②「積極的な関わり」、Ⅲ - ①「施設、利用児・者、業務内容の理解」、Ⅲ - ③「尊重した言葉遣いや態度」、Ⅲ - ⑨「安全衛生面についての配慮」であった。その中でも、評価票との大きなズレが生じていたのはⅢ - ⑨「安全衛生面についての配慮」であり、0.74 自己評価が上回るもので、全項目の中でも最も大きなズレであった。実際に足を踏み入れ実習させていただくことで、施設ならではの生活の場としての細やかな安全や衛生面の配慮を目の当たりにし、現場でなければ学ぶことができないものであったと学生が認識したと考えられる。

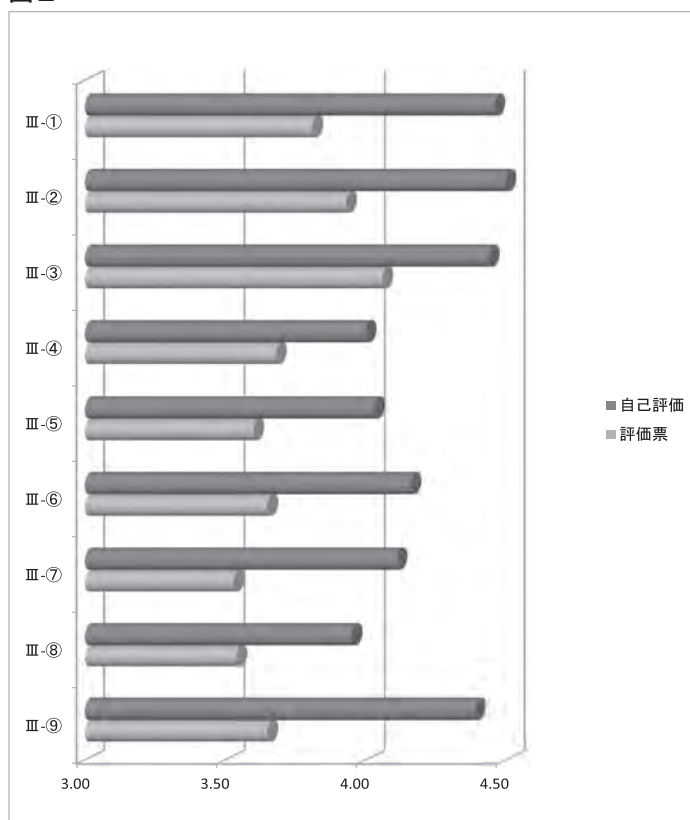
ズレに焦点を当てると、Ⅲ - ①「施設、利用児・者、業務内容の理解」、Ⅲ - ⑦「職員

間の役割分担やチームワークの理解」が続いて大きなズレとなっており、それぞれⅢ－① 0.65, Ⅲ－⑦ 0.58 自己評価が上回っている。これに関しても、学生にとっては現場でなければ学べない部分であるため、実習させていただくことにより学ぶことができた」と評価したと思われる。しかし、現場においては日々試行錯誤しながら培ってきた施設独自のノウハウが詰まったものであり、限られた実習期間で理解することは容易ではないと評価されたものと思われる。

表2

評価内容	自己評価	評価票	評価内容
Ⅲ - ①	4.46	3.81	施設の目的、機能、利用児・者、業務内容などについて理解しようとしていた。
Ⅲ - ②	4.50	3.93	利用児・者に積極的に関わり、理解しようとしていた。
Ⅲ - ③	4.44	4.06	利用児・者を尊重し、適切な言葉遣いや態度で接していた。
Ⅲ - ④	4.00	3.68	利用児・者の個性や特性に応じた対応を考慮していた。
Ⅲ - ⑤	4.03	3.60	利用児・者の援助・支援について指導者やスタッフに質問し、理解しようと努めていた。
Ⅲ - ⑥	4.16	3.65	利用児・者の援助・支援に関する知識、技術を身に付けようとしていた。
Ⅲ - ⑦	4.11	3.53	職員間の役割分担やチームワークのあり方を理解しようとしていた。
Ⅲ - ⑧	3.95	3.54	個人のプライバシーが具体的にどのように保護されているか学ぼうとしていた。
Ⅲ - ⑨	4.39	3.65	施設全体の安全、利用児・者の安全や衛生面について配慮していた。

図2



【3】実習態度・日誌について（平成25年度対比）

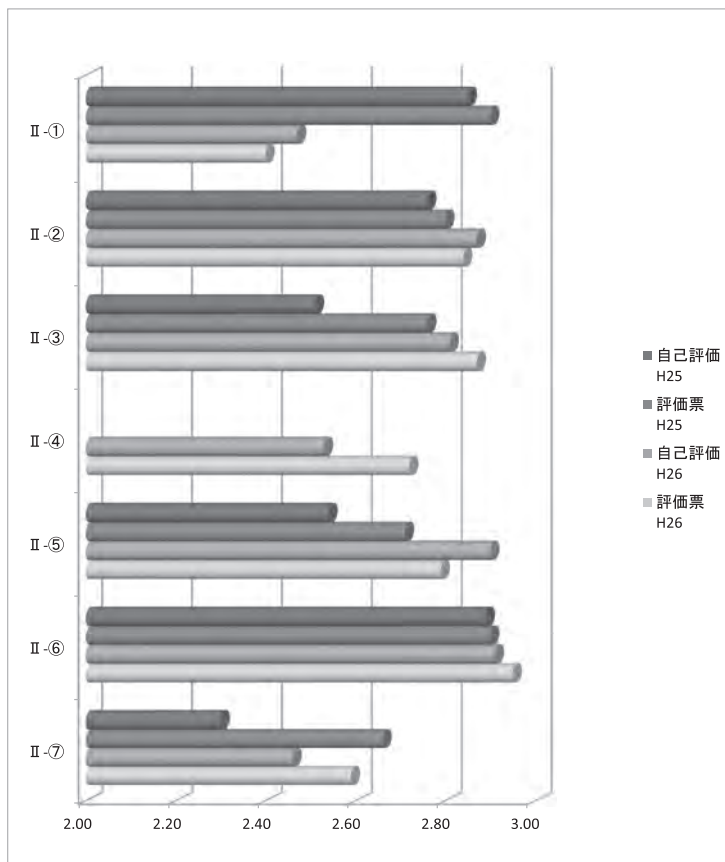
実習態度・日誌についてのそれぞれの平均を表3. 評価の対比を図3. に示す。

項目Ⅱ-①「出勤時刻」であるが、自己評価及び評価票ともに前年度より大きく低下している。これに関しては平成26年度の評価票に「30分前出勤」と追記したことが要因と考えられ、そのため25年度より評価基準が厳しくなっていると推測される。学生が余裕をもって出勤し速やかに実習に入ることができることをねらいとして追加したが、実習施設によっては実習生が30分前に出勤することで、利用児・者及び職員にご迷惑をお

表3

評価内容	自己評価 H25	評価票 H25	自己評価 H26	評価票 H26	評価内容
Ⅱ - ①	2.85	2.90	2.47	2.40	出勤時刻（30分前）
Ⅱ - ②	2.76	2.80	2.87	2.84	挨拶や服装
Ⅱ - ③	2.51	2.76	2.81	2.87	言葉遣い
Ⅱ - ④			2.53	2.72	勤務態度
Ⅱ - ⑤	2.54	2.71	2.90	2.79	指導・助言を受ける態度
Ⅱ - ⑥	2.89	2.90	2.91	2.95	日誌の提出期限
Ⅱ - ⑦	2.30	2.66	2.46	2.59	日誌の誤字・脱字

図3



かけすることも考えられる。実習施設の状況に応じて、余裕をもつての出勤時間を融通することが望ましいと思われるが、そうになると、評価票にある「30分前出勤」は果たせなくなる。よって次年度は保育実習Ⅰaの項目改善に準じ、「余裕をもって」と改めたい。

Ⅱ－④「勤務態度」は、新たに加えた項目であるため、平成26年度のみデータとなる。

評価間のズレが最も少なく、かつ全項目の中で高い評価であったのがⅢ－⑥「日誌の提出期限」であった。期限を守って出せたかどうかを問うものであり、判断基準が明確であることも評価しやすく、ズレの少ない要因となっている。続いてズレの少ないのは、Ⅱ－②「挨拶や服装」であり、この項目においても挨拶が出来ていたか、服装が適切であったかの判断であり、評価に迷いやズレが生じにくいものと考えられる。

評価票のみを比較してみると、平成25・26年度共に大きなズレはなく、評価項目を追記したⅡ－①、Ⅱ－④を除いて一貫した評価であると捉えることができる。その中でもⅡ－⑦を除いた4つの項目において、平成26年度の方が高い評価を得ていることが分かる。

双方の年度において「自己評価」より「評価票」の方が高いのがⅡ－⑦「日誌の誤字・脱字」である。誤字・脱字は、実習記録簿の記載により判断が明確であることに加え、実習指導において繰り返しかえし指導していることが、自己評価の若干の低下に繋がっている可能性がある。学生は誤字・脱字をなくしていかなければならない現状を自覚していると思われるが、結果として改善できていないことが示された。誤字・脱字をなくするための実習指導の一環として「保育用語漢字試験」を実施し改善を図っているが、さらなる工夫が必要である。

【4】実習内容について（平成25年度対比）

実習内容についてのそれぞれの平均を表4. 評価の対比を図4. に示す。

Ⅲ－⑧「個人のプライバシーの保護」は、平成26年度に新たに設けた項目であり、そのため、26年度のみデータとなっている。

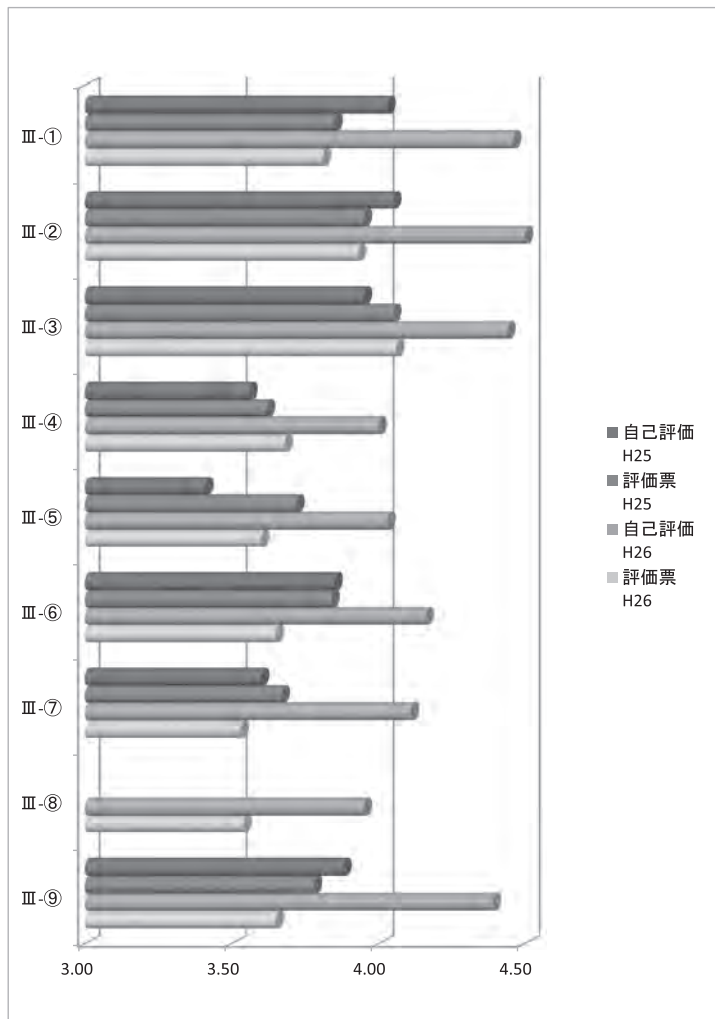
全ての項目に共通することは、平成26年度の自己評価の突出した高さである。その中でも特に自己評価が高く、かつズレが大きいのはⅢ－②「積極的に関わり理解する」、Ⅲ－①「施設、利用児・者、業務内容の理解」、Ⅲ－③「尊重した言葉遣いや態度」、Ⅲ－⑨「安全衛生面についての配慮」であった。

評価票のみに焦点を当て、平成25・26年度を比較すると大きなズレは認められず、全ての項目において一貫した評価傾向にあることがわかる。その中でも双方の年度で高い

表4

評価内容	自己評価 H25	評価票 H25	自己評価 H26	評価票 H26	評価内容
Ⅲ－①	4.03	3.85	4.46	3.81	施設の目的、機能、利用児・者、業務内容などについて理解しようとしていた。
Ⅲ－②	4.05	3.95	4.50	3.93	利用児・者に積極的に関わり、理解しようとしていた。
Ⅲ－③	3.95	4.05	4.44	4.06	利用児・者を尊重し、適切な言葉遣いや態度で接していた。
Ⅲ－④	3.56	3.62	4.00	3.68	利用児・者の個性や特性に応じた対応を考慮していた。
Ⅲ－⑤	3.41	3.72	4.03	3.60	利用児・者の援助・支援について指導者やスタッフに質問し、理解しようと努めていた。
Ⅲ－⑥	3.85	3.84	4.16	3.65	利用児・者の援助・支援に関する知識、技術を身に付けようとしていた。
Ⅲ－⑦	3.60	3.67	4.11	3.53	職員間の役割分担やチームワークのあり方を理解しようとしていた。
Ⅲ－⑧			3.95	3.54	個人のプライバシーが具体的にどのように保護されているか学ぼうとしていた。
Ⅲ－⑨	3.88	3.78	4.39	3.65	施設全体の安全、利用児・者の安全や衛生面について配慮していた。

図4



評価を得た項目は、Ⅲ-③「尊重した言葉遣いや態度」、次にⅢ-②「積極的に関わり理解する」であった。最も低い評価は、Ⅲ-⑦「職員間の役割分担やチームワークの理解」であった。

また、平成26年度の自己評価が高いにも関わらず、Ⅲ-①「施設、利用児・者、業務内容の理解」、Ⅲ-②「積極的に関わり理解する」、Ⅲ-⑤「質問し理解する」、Ⅲ-⑥「知識・技術を身に付ける」、Ⅲ-⑦「職員間の役割分担やチームワークの理解」、Ⅲ-⑨「安全衛生面についての配慮」以上6項目において、平成26年度の評価票の方が25年度より低い評価となっている。評価票が低いにも関わらず、自己評価が高い結果についてであるが、実習に臨むにあたってのマナーや最低限のルール、実習を成立させるための基本的な事項の確認に力を注がざるを得ない状況が反映されている可能性が考えられ、実習内容について十分指導できる体制や時間の確保が望まれる。

【5】総合評価（平成25年度対比）

総合評価の平均を表5. 評価の対比を図5. に示す。

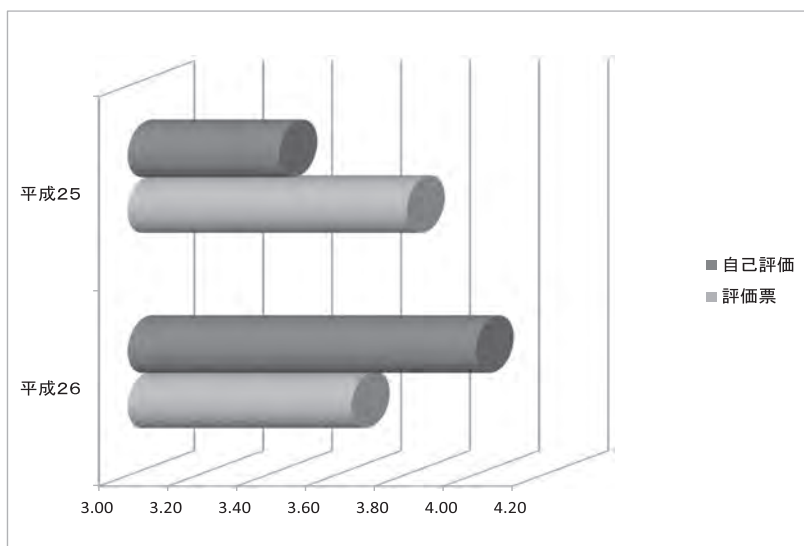
平成25年度の「自己評価」と「評価票」の対比をみると、自己評価が評価票より0.37低く、26年度においては逆に自己評価が評価票より0.36高くなっている。26年度は、25年度よりも評価票の評価は低下しているにもかかわらず、自己評価が高い。

評価項目Ⅱの「実習態度・日誌について」よりも、Ⅲの「実習内容について」の評価の方が、より強く総合評価に反映されており、実習内容についての指導の改善が必要なが示唆されている。

表5

評価内容	自己評価	評価票
平成25	3.44	3.81
平成26	4.01	3.65

図5



【6】 総合評価の評価差 平成25年度対比（評価票－自己評価）

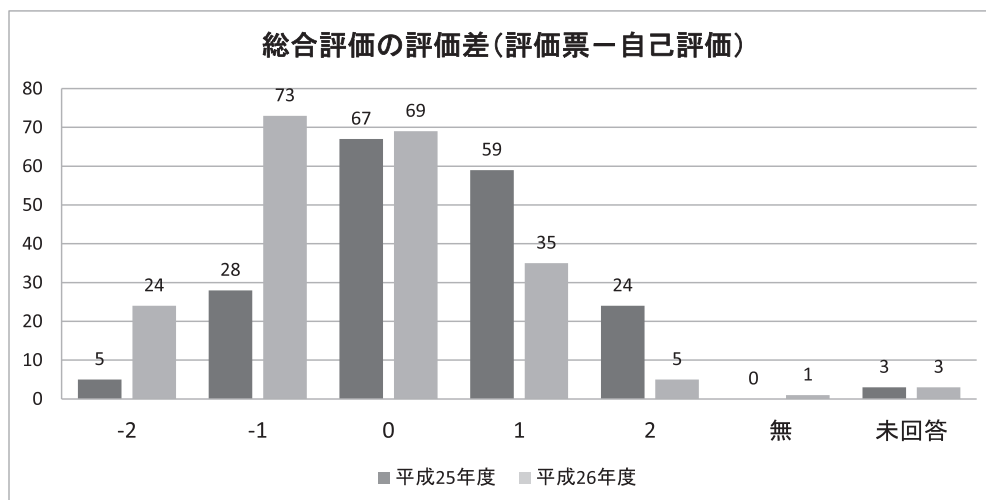
総合評価における評価票評価から自己評価を引き、そのズレを評価差とした。評価差別に人数と割合を示したものが表6. 図6. である。

総合評価のズレからも明らかのように、25年度の自己評価の低さ、及び26年度の自己評価の高さが割合でも示されている。自己評価の方が評価票を「2」上回った（評価差－2）割合として、平成25年度は2.7%であったのに対して、26年度は11.4%と高い。さらに、自己評価の方が「1」上回った（評価差－1）割合として、平成25年度15.1%であるのに対して、26年度は34.8%であり、平成26年度の内訳の中で最も高い割合を占めている。

表6

評価差	平成25年度		平成26年度	
	人数	割合	人数	割合
-2	5	2.7%	24	11.4%
-1	28	15.1%	73	34.8%
0	67	36.0%	69	32.9%
1	59	31.7%	35	16.7%
2	24	12.9%	5	2.4%
無	0	0.0%	1	0.5%
未回答	3	1.6%	3	1.4%
総数	186	100.0%	210	100.0%

図6



評価票の方が自己評価を「2」（評価差2）上回った割合としては、平成25年度12.9%であったのに対して、26年度は2.4%、さらに、評価票の方が自己評価を「1」（評価差1）割合としては、平成25年度31.7%、26年度16.7%である。

双方の年度ともに、評価差「0」の割合に大きな差はない。25年度及び26年度における評価差「-1」・「1」のズレ、及びズレ幅の大きい「-2」・「2」の存在が、総合評価全体のズレを及ぼす要因となっている可能性が示されている。これらのズレ幅の大きい学生に対して、一人一人に対応するための個別の指導のあり方を検討する必要がある。

2. 総合評価のズレの分析

平成26年度は、25年度と比較して自己評価の高さが特徴として挙げられる。また、今回は保育実習Ⅰb（施設実習）のみに焦点を当て検討しているが、平成25年度入学者の自己評価における傾向としては、保育実習Ⅰa（保育所）、幼稚園教育実習においても、自己評価の高さが際立った結果が示されている。

そこで、「自己評価」と「評価票」の総合評価差「-2」及び「2」のズレに着目し、記述内容及び評価項目からその要因を検討することとする。

「自己評価」における記述式の総合評価、及び「評価票」の記述式の総合所見のそれぞれ評価に関する文節を一部抜粋し表示した。また、学生の学びの視点をさらに詳しく検討する材料として、実習終了後に自由記述した①利用児・者とのかかわりから学んだこと、②利用児・者から学んだこと、③保育者・支援員から学んだこと、の3項目を加えて提示する。

【1】総合評価ズレ「-2」

平成26年度の総合評価において、評価票より自己評価が「2」上回った25名のうち、9名を抽出し、表7. 及び表8. に示す。

Aは、Ⅲ-⑤「質問し理解する」、Ⅲ-⑨「安全や衛生面の配慮」が「-2」のズレとなっており、いずれも自己評価は「5」と評価している。ミーティングでの積極性がい

まひとつであったという評価票記述から、利用者にかかわろうとする姿を評価されながらも、そのかかわりを通して疑問に思うことについての質問や、さらに掘り下げた質問を自ら行い、理解することが十分されなかったと推測される。

Bは、積極的に質問できたことが双方の記述からうかがえ、Ⅲ-⑤「質問し理解しようとした」と努めた、Ⅲ-⑥「知識、技術を身に付ける」、Ⅲ-①「施設、利用児・者、業務内容の理解」においてズレは少ない。しかし、実習内容についての自己評価が全て「5」と高くなっていることが、総合評価のズレの要因と考えられる。また、学びに関する記述内容からは、記録に関する記載があるものの、実習内容の項目中に記録に関する具体的な評価項目がないため、評価が数値として反映されていない。記録に関しては、日誌の提出期限及び誤字・脱字における評価項目のみであるため、Bに限らず日誌の内容の評価が、評価表や自己評価に反映されていない可能性がある。

Cにおいては、Ⅲ-②「積極的に関わり理解する」が「-3」のズレとなっている。徐々に積極的に関わられたことを自己評価にて「5」としたと考えられるが、評価票の評価は「2」であり、「丁寧な支援が実施できていたので、もう少し元気を出せたらよかった」という記述内容からその理由がうかがえる。しかし、学びに関する記述の中に支援員からの学びとして、入浴介助に関する記述があるように、Ⅲ-⑨「安全衛生面についての配慮」においては評価票においても「4」と高い評価を得ている。実習内容についての自己評価が高く、「-2」のズレが見られる項目として、Ⅲ-④⑤⑥⑦の項目が挙げられ、内容としては「個性や特性に応じた対応」や「援助・支援に関する知識技術を身に付けようとしたか」、及び「援助支援について質問し理解しようとしたか」、「職員間の役割分担やチームワークを理解しようとしたか」、に関する項目であり、自己評価としては自分なりに努力した点を「5」と評価したものと思われる。

Dでは、関わりにおける積極性に対する記述における評価としては、双方とも一致している。しかし、評価票の記述に「実習中の気づきから、積極的に質問したり、記録を丁寧にまとめられると、さらに深められる」とあるように、やはりその中身を深めるまでには到達しなかったことがうかがえる。また、「-2」のズレとなったⅢ-⑨「安全衛生面についての配慮」において自己評価が高くなっていることは、施設ならではの細やかな配慮や事故防止対策を目の当たりにし、深めるまでには至らなくとも観察し、知ることができただけでも大きな収穫であったと評価していると思われる。

Eでは、日誌の記載について、双方の記述によるズレが確認される。自己評価記述では、「指導をいただき改善の後、良く書けていると評価をいただいた」と記されているが、評価票の記述には、「徐々に細くなってきたものの、気づきの部分が少し不足していた」となっている。

「-2」のズレをみるとⅢ-②「積極的に関わり理解する」、Ⅲ-③「尊重した言葉遣いや態度」、Ⅲ-④「個性や特性に応じた対応」となっており、利用児や職員との積極的なコミュニケーションがなかなかとれず、実習終了が近づき慣れてきた頃に改善でき

たことについての受け止めが、双方のズレとなって評価に現れたものと思われる。

また、Ⅱ－③「言葉遣い」、Ⅱ－④「勤務態度」、Ⅱ－⑤「指導・助言を受ける態度」の項目が「－1」のズレであり、これらの項目に関しても上記の双方のズレとの関連が見られる。

Fにおいて、双方で共有するのは、コミュニケーションについて記述の中で触れている点である。自己評価の記述からは、試みたもののコミュニケーションがうまく図れなかった様子が見えが、評価票の記述においては、「自らコミュニケーションを図ろうとする姿が見られなかった」とあり、試みようとする努力すらなかったと受け止められた可能性がある。

「－3」と大きなズレが生じていた項目は、Ⅲ－③「適切な言葉遣いや態度」、Ⅲ－⑧「個人のプライバシーの保護」であり、いずれも自己評価は「5」と高い。しかも評価票の記述には、「質問等もあまりなく、慣れてきて敬語でない時もみられた」とあり、このような言動について本人が自覚しておらず、改善点として気づいていなかった可能性がある。ただし、Ⅲ－⑤「質問し理解しようと努めた」に関しては双方が「3」と評価していることから、ズレは生じていない。

日誌の誤字・脱字に関しても「－2」のズレがあり、記録記載に関する実習内容以前のマナーとしての意識の低さ、自覚のなさがうかがえる。

Gは、支援の範囲と判断に苦慮したにもかかわらず、その点に関して質問したり解決策を見いだそうと試みる言動として示されなかったことが推測される。

Ⅲ－②「積極的に関わり理解する」、Ⅲ－⑤「質問し理解しようと努めた」、Ⅲ－①「施設、利用児・者、業務内容の理解」の項目において「－2」のズレが見られる。また、Ⅱ－④「勤務態度」、Ⅱ－⑤「指導・助言を受ける態度」の項目においても「－2」のズレが見られる。自己評価の記述からは、支援の範囲を自らの判断とし、自ら質問するどころか日誌にコメントいただいたことに対しても、「その場で言ってもらえたら動けた」と受け身であり、自ら積極的に動くことが出来なかった実習が垣間見える。また、評価票記述にある日誌の記載についても「どのようなかわり方をしたか、日誌から伝わってきませんでした」と評価されているが、日誌の内容に関する評価項目がないため、記述からの情報でしかうかがい知ることができない。

Hに共通することは、笑顔と積極性である。Ⅱ－③「言葉遣い」、Ⅲ－③「適切な言葉遣いや態度」の項目は自己評価及び評価票の双方で最も高い評価で一致している。

唯一「－2」の評価であったのは、Ⅲ－⑦「役割分担やチームワークのあり方の理解」であり、これは評価票が低かったのではなく、学生としては十分理解できたと自己評価して高い評価を下した結果と考えられる。職員間の役割分担やチームワークは、限られた実習期間の中で全てを理解するには限度があり、学生としては実際の連携の一部を見たことで、理解できたと判断する可能性がある。

Iは評価票の記述にもあるように、「利用者に対しての言葉遣い、かかわりの丁寧さ」

「アドバイスを素直に理解し関わる姿」が、実習態度・日誌についてのⅡ項目の一貫して高い評価へと繋がったと考えられる。しかし、実習内容についてのⅢの項目においては、Ⅲ－⑤「質問し理解しようと努めた」、Ⅲ－⑧「個人のプライバシーの保護」を除いて、自己評価の方が評価票を上回る高い評価となっている。

表7 総合評価ズレ - 2

	自己 評価 総合 評価 a	評価 票 総合 評価 b	b-a	自 己 評 価 記 述	評 価 票 記 述
A	5	3	-2	欠席、遅刻、早退などなく、毎朝忘れることなく日誌も提出していた。	得意なことを活かし、利用者と沢山の場面で関わる姿がありました。毎日のミーティングでは、いまひとつ積極性が欲しいと思われるところがありましたが、その反面利用者の側に寄り、関わろうとする姿が見られました。
	記述要約			実習態度：出勤状況○ 日誌：提出○	かかわり：得意なことを活かして関わる○、利用者の側に寄る○ 実習態度：反省会（ミーティング）での積極性×
	① 相手の言葉が理解できないので、どのように関わっていけばよいのかわからなかった。生活の中で、自分の出来る事は自分で行っていた。相手が言葉を上手く話せない場合もあるので、状況を見て相手の気持ちを理解できるようにすることが必要であると思った。				
	② 帰省の時期になると楽しそうに家族と会えると話しをしていて、帰省の大切さがわかった。				
	③ 利用者の方が、支援員の方に頼りすぎないように、利用者の方へは最低限の援助を行い、実際の家庭のように生活していて、利用者の方が楽しそうに生活することができていたこと。				
B	5	3	-2	積極的に質問し、お話を聞くことができました。研究保育や読み聞かせや手遊びなども積極的にできたので、勉強になりました。	職員に良く質問し学ぼうとする意欲が見られたが、子ども達への関わりは、観察していることが多く、もう少し声を出し言葉をかけて一緒に遊び、ふれあうことができればよかったと感じる。
	記述要約			質問：積極的○ かかわり：研究保育、読み聞かせ○	質問：意欲○ かかわり：観察の多さ、ふれあいの少なさ△
	① 子ども達を見守る中で、「記録」がとても大切な存在だと知りました。子ども達と過ごす中で、興味あるもの好きな物がわかったり、子ども達と溶け込めた事がとても嬉しかったです。				
	② 大型絵本を読んだ際、とても反応してくれた。心の安定が子ども1人ひとりにあるので、1人ひとりに寄り添い声かけや対応を行うこと。				
	③ 子どもとコミュニケーションをとりながら行う。先生同士の情報交換とコミュニケーションをこまめに取り合うこと。記録は子ども達が病気などにかかった時の大切な資料なので毎日記録し、確認を行う。				
C	5	3	-2	慣れていくうちに、その方たちと自分から積極的に関わるできるようになり、自閉症に興味がもてました。	言葉遣い、利用者対応は丁寧な支援が実施できていたので、もう少し元気を出せたらよかったと思います。
	記述要約			かかわり：徐々に積極的○	かかわり：丁寧な支援○ 実習態度：積極性△
	① 会話ができたり、自分のことは自分でできる方が多くて驚きました。最初は、利用者とは接するのが怖いと思っていたけど、毎日同じ時間を過ごす中で、「ありがとう」「ごめんね」という言葉を聞いた時は感動しました。話しをしている中でいつの間にか自分が笑わされていた時は楽しいと思えました。				
	② 利用者同士の助け合いをみて、助け合うことが大事だといろいろな場面を見て思いました。				
	③ 理解をするのが難しい方へ、次は何をするのかを伝える方法。入浴介助をする時は一番端っこに立って洗いながら浴槽を見たりして、濡れていなか危ないか確認することが大切と教えていただきました。				

D	5	3	-2	積極的に子ども達と関わるよう努力をした。ほぼ毎日本を読んだり、保育活動と一緒に参加するなど実習内容も充実していた。	自ら子どもに寄り添って関わりをもち、細かな動きに気づき対応されていました。実習中の気づきから、積極的に質問したり、記録に丁寧にまとめられると、さらに深められると思います。
	記述要約			かかわり：積極的努力○	かかわり：寄り添い、気づき対応○ 質問：積極的△ 日誌：内容（丁寧にまとめる）△
	① お茶を飲む、着替えをするなど、行動一つ一つにおいて、声かけが必要だと思った。				
	② とにかく関わる。コミュニケーションが大切だと思った。				
	③ 1人ひとりの関わりを大切にしている。職員全員が、子ども1人ひとりのこと（状態）を把握していた。その日入るクラスの担当の先生が、子ども全員の特徴、気をつけることを細かく教えてくださった。				
E	4	2	-2	日誌は、始めは内容が少ないなど指導をいただきましたが、最後は良く書けていると言われました。	日誌に関しては、徐々に細くなってきたものの、気づきの部分もう少し不足していた感じがあります。小さな事でも見逃さない視点が大切だと思います。職員や子ども達に遠慮されていたのか、声かけが全くされず心配しましたが、終わりに近づくにつれて徐々に、子ども達への声かけもできていました。
	記述要約			日誌：指導後改善○	日誌：内容（気づきの不足）△ かかわり：利用児や職員とのコミュニケーション×
	① 家庭的な雰囲気をつくることを学びました。家庭のように家事をしたり、外で遊んでいる時など子どもたちは学校での出来事などを話してくれました。なんでも話してくるので、一つひとつしっかりと聞くことが大切だと学びました。				
	② 入所している子ども達全員が協力していたのですごいなと思いました。そして高学年が低学年のお世話をしていました。ここで学んだことは、協力することです。そして困っている人には手助けすることです。常に周りの人のことも考えて行動したいと思いました。				
	③ 実習中常に言われた事は「会話」です。茶碗を洗う時、洗濯物を干す時子どもと一緒にするのですが、黙ってするのではなく、会話することが大切だと学びました。そして、甘やかすのではなく、叱るときはきちんと叱ることも大切だと学びました。				
F	4	2	-2	初めは自分から話しかけることが出来ず会話がほとんどありませんでした。	最終日まで自らコミュニケーションを図ろうとする姿が見られませんでした。日誌についても誤字脱字が多かったです。質問等あまりなく、慣れてきて敬語でない時みられました。
	記述要約			かかわり：コミュニケーションのきっかけ×	かかわり：コミュニケーションを図ろうとする姿× 日誌：誤字脱字の多さ× 質問：あまりない× 実習態度：慣れによる敬語の欠如×
	① コミュニケーションがうまく取れず、相手の思いの受け止め方が分からなかったが、1人ひとりの障害を聞くことで自分も理解することができた。				
	② 決められたことはきちんとされており、すごいと思った。バスに乗る時や食事の時に決まった所に座らないとパニックになる方もいるので、みんなが気にかけていた。				
	③ 障がいに応じて、食事をとる場所、時間などをずらして対応していた。朝、顔を見るだけで、少しの変化でも気づいていた。				

G	4	2	-2	<p>初等部が主だったので、ある程度のごことは自分で行ってたため、あまりすることが正直なかった。日誌のコメントの欄に沢山のアドバイスを書いてくださったが、その場で言ってもらえたら私も動けたのになと感じました。</p>	<p>短い実習期間でしたので、もう少し積極さが欲しいと感じました。子どもたちとの関わりも、特定の子のみに限られていたので、施設にいるいろんな子どもたちへの気持ちにふれることが十分にできなかったのではと残念に思います。悩んだこと、困ったこと、対応に苦慮したことやどのような関わり方を子どもとしたか、日誌からも伝わってきませんでした。目標をしっかりと持って実習に臨んで欲しいと思います。</p>
	記述要約			<p>かかわり：支援の範囲と判断△</p>	<p>実習態度：積極性×、目的意識× かかわり：特定の子にも限定× 日誌：関わり方についての記載×</p>
	<p>① 不安でしたが、とても実習生を温かく受け入れてくれて、とても楽しい実習になりました。</p>				
	<p>② 子ども達同士で注意し合っていて、とてもよい環境だと思いました。子どもたちはとても明るいですが、自由時間にアルバムを開いて考えている姿を見て、外見はとても明るく元気な子ども達ですが、心には悩みを抱えているんだと感じました。</p>				
<p>③ 子どもには、担当の職員が決まっています、その職員と子どもの信頼関係や愛着関係がしっかりしていて、大切だと改めて感じました。また心のケアをするために絵を描いて好きな色で色塗りをして、そこから子どもの気持ちを読み取り、その子にあった対処をしている様子を見る事ができました。</p>					
H	5	3	-2	<p>常に自分でできることを探し行動することができていたと思う。先生方がどのようなことに配慮しながら保育されているのかを考えてみるようにしていた。障がい児と関わる時は笑顔で目を見ながら話すことを心がけることで心を通わすことができました。</p>	<p>元気で明るい態度で実習されており、子どもたちとも常に笑顔で関わる事ができていました。</p>
	記述要約			<p>実習態度：積極的（意欲的）○ かかわり：観察（先生方の配慮点）○、 笑顔、視線の心がけ○</p>	<p>実習態度：元気、明るい○ かかわり：常に笑顔○</p>
	<p>① 「障がい」という言葉は、注意すること配慮することがあるだけで、保育の仕方は何も変わらないということ。いけないことはいけないとしっかり教えなければならないので、子ども達が大人になっても困らない援助が必要だと学んだ。1人ひとりの性格や特徴を把握しておくことが大切。</p>				
	<p>② 話をする時は、しっかり目を見て話すこと。視線を合わせることで子ども自身も真剣に聞いてくれて理解してくれるので、大事なことに気づくことができた。</p>				
<p>③ 1人ひとりに合わせた対応や姿勢があること。</p>					
I	5	3	-2	<p>毎日違う活動に参加させていただいたので、いろいろな体験ができました。</p>	<p>利用者に対しての言葉遣い、関わりも丁寧でした。また、職員からのアドバイスも素直に理解して関わる姿が見られました。</p>
	記述要約			<p>かかわり：さまざまな活動体験○</p>	<p>かかわり：言葉遣い○、丁寧な関わり○ 実習態度：指導後の対応、理解○</p>
	<p>① かかわり方、話し方を学びました。利用者の方は話すことが楽しい様子で会話はとても多い実習でした。</p>				
	<p>② 1人ひとりの特徴や個性に気付かされました。</p>				
<p>③ 入浴介助や毎食後の仕上げ磨き、ケア活動など、普段経験できない事をたくさんさせていただいた。</p>					

表8. 総合評価ズレ－2 (総合評価－自己評価)

		Ⅱ - ①	Ⅱ - ②	Ⅱ - ③	Ⅱ - ④	Ⅱ - ⑤	Ⅱ - ⑥	Ⅱ - ⑦	Ⅲ - ①	Ⅲ - ②	Ⅲ - ③	Ⅲ - ④	Ⅲ - ⑤	Ⅲ - ⑥	Ⅲ - ⑦	Ⅲ - ⑧	Ⅲ - ⑨	Ⅳ
自 評 ズレ	A	2	3	3	3	3	2	3	4	4	4	4	5	4	4	3	5	5
		3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	3	3	3	3	3
		1	0	0	0	0	1	0	-1	-1	-1	0	-2	-1	-1	0	-2	-2
自 評 ズレ	B	2	3	3	3	3	2	2	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
		3	3	3	3	3	3	3	4	3	3	3	4	4	3	3	3	3
		1	0	0	0	0	1	1	-1	-2	-2	-2	-1	-1	-2	-2	-2	-2
自 評 ズレ	C	2	3	3	3	3	2	2	4	5	4	5	5	5	5	4	5	5
		2	3	3	3	3	3	2	3	2	3	3	3	3	3	3	4	3
		0	0	0	0	0	1	0	-1	-3	-1	-2	-2	-2	-2	-1	-1	-2
自 評 ズレ	D	2	3	3	3	3	2	3	5	4	5	4	4	4	4	3	5	5
		3	3	3	3	3	3	2	4	3	4	3	3	4	3	3	3	3
		1	0	0	0	0	1	-1	-1	-1	-1	-1	-1	0	-1	0	-2	-2
自 評 ズレ	E	2	3	3	3	3	2	2	4	4	4	4	2	3	3	2	4	4
		2	3	2	2	2	3	3	3	2	2	2	2	3	3	2	4	2
		0	0	-1	-1	-1	1	1	-1	-2	-2	-2	0	0	0	0	0	-2
自 評 ズレ	F	2	2	3	2	3	2	3	4	3	5	3	3	4	4	5	3	4
		2	3	2	2	3	3	1	3	2	2	3	3	2	2	2	3	2
		0	1	-1	0	0	1	-2	-1	-1	-3	0	0	-2	-2	-3	0	-2
自 評 ズレ	G	2	3	3	3	3	2	2	4	4	4	3	4	3	3	3	4	4
		2	3	2	1	1	3	3	2	2	3	2	2	2	2	3	2	2
		0	0	-1	-2	-2	1	1	-2	-2	-1	-1	-2	-1	-1	0	-2	-2
自 評 ズレ	H	2	3	2	3	3	2	3	5	5	5	4	4	4	5	3	4	5
		3	3	3	3	3	3	3	4	4	5	3	3	3	3	3	3	3
		1	0	1	0	0	1	0	-1	-1	0	-1	-1	-1	-2	0	-1	-2
自 評 ズレ	I	2	3	3	2	2	2	2	5	5	5	4	3	4	4	3	4	5
		3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	3	3	3	3	3	3
		1	0	0	1	1	1	1	-2	-2	-1	-1	0	-1	-1	0	-1	-2

【2】 総合評価ズレ「2」

平成26年度の総合評価において、評価票より自己評価が「2」下回った5名のうち、3名を抽出し、表9、表10. に示す。

Jにおいては、自己評価のコメントの中で、変化に対する判断や対応の難しさを記している。一方、評価票記述においては、「色々なことを学ぼうと周りを見て様々なことを感じとった様子」「解らないことや疑問に思った事は質問できている」「利用者とのコミュニケーションも慣れるに従い積極的になった」などが記されている。実習内容についてのⅢの項目が自己評価と同等またはそれを上回る評価となった要因として、変化に対する判断や対応の難しさを抱えたままにしているのではなく、積極的に質問したことにあるのではないかとと思われる。質問することで、学生の疑問に感じている視点が伝わり、適切な助言をいただいたことで、それらを踏まえて関わりや実践に活かすことがで

表9 総合評価ズレ2

	自己評価 総合評価 a	評価票 総合評価 b	b-a	自己評価 記述	評価票 記述
J	3	5	2	実習内容は豊富であり、その各部署での利用者さんの対応では、変化に追いつけない部分がありました。	真剣に実習に取り組み、色々なことを学ぼうと周りを見て様々なことを感じとった様子であった。解らない事や疑問に思った事は質問も出来、利用者の方とのコミュニケーションも慣れるに従い、自分から積極的に行っている様子であった。
	記述要約			かかわり 変化に対する対応×	実習態度 真剣(意欲)○ 質問 分からない事、疑問点○ かかわり コミュニケーション積極的○
	① 心の変化や波があるので、判断して対応するのが難しいと思いました。利用者さんとコミュニケーションを取る時に、聞き取りづらかったり分からなかったりしたので、1人ひとりの特徴(言葉)を知る必要がありました。障がいに対して固定せず、臨機応変に対応しなければならない。				
	② 気配りをされていて、体調などを気遣ってくれていた。				
③ 戸惑ったり、困ったりしている時は、すぐ声をかけて対応する。					
K	3	5	2	施設の利用者と職員がどのように関わっていたか、どのような支援をしているか積極的に聞けたと思う。利用者ともたくさんコミュニケーションをとることができた。	利用者とのコミュニケーションも日を重ねるごとに、関わりも近づいていってました。自然にサポートする姿勢もあり、笑顔で支援に入り、利用者からも声をかけられるように親しくなっていました。
	記述要約			質問 かかわり、支援○ かかわり 利用者とのコミュニケーション○	かかわり コミュニケーション○、自然なサポート○ 実習態度 笑顔○
	① 職員と利用者の関わっている様子を拝見して、学ぶことが多かった。利用者の目を見て真剣に話を聞く職員はすごいと感心しました。				
	② 利用者から話しかけたり、コミュニケーションを取ろうとしてくれて、会話ができなくても、ボディータッチやハイタッチをしたりすることで、利用者も嬉しそうにしてくれました。				
③ 1人ひとりに合った対応、支援をしていました。					
L	3	5	2	施設実習を終えて、自分ではできていた方かなと思いました。	空いた時間も、利用者の元へ行き、常に誰かと一緒に過ごしている姿が印象的でした。質問は、遠慮があっても出まensendしたが、メモを適切に取り活用していました。
	記述要約			実習全般 ○	かかわり 常に利用者に関わっている○ 質問 遠慮のためか△ 実習態度 メモの適切な活用○
	① 利用者の方が大きな声で挨拶をしてくださって、緊張がほぐれました。障がいを持っているからといって、何もできないわけでもないということを改めて感じました。				
	② 清掃の時などに、本当に細かいところまで掃除していたので、素晴らしいなと思いました。				
③ 利用者の方々、1人ひとりのことを理解することがすごく大事ということが、改めてわかりました。					

表 10. 総合評価ズレー 2 (総合評価－自己評価)

		Ⅱ - ①	Ⅱ - ②	Ⅱ - ③	Ⅱ - ④	Ⅱ - ⑤	Ⅱ - ⑥	Ⅱ - ⑦	Ⅲ - ①	Ⅲ - ②	Ⅲ - ③	Ⅲ - ④	Ⅲ - ⑤	Ⅲ - ⑥	Ⅲ - ⑦	Ⅲ - ⑧	Ⅲ - ⑨	Ⅳ
自	J	2	3	2	2	2	2	3	5	5	4	4	4	4	3	4	5	3
評		3	3	3	3	3	3	3	5	5	5	4	5	5	5	4	5	5
ズレ		1	0	1	1	1	1	0	0	0	1	0	1	1	2	0	0	2
自	K	2	3	3	3	2	2	2	3	3	3	3	3	2	3	3	3	3
評		2	3	3	3	3	3	3	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
ズレ		0	0	0	0	1	1	1	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2
自	L	2	3	3	3	3	2	2	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3
評		3	3	3	3	3	3	2	5	5	5	4	5	4	5	5	5	5
ズレ		1	0	0	0	0	1	0	1	1	1	1	2	1	2	2	2	2

きたのではないかと。また、関わることでさらに疑問点や知りたいという意欲にも繋がる。そのような関わりを繰り返し、利用者をさらに深く知ることで、より良いコミュニケーションが図れるようになるのではないかとと思われる。このような一連の行動が、真剣に実習に取り組む姿勢や意欲と受け止めていただけたのではないかとと思われる。

Kで共通することは、積極性と良好なコミュニケーションである。評価票の記述に「自然にサポートする姿勢」「笑顔で支援に入り、利用者からも声をかけられるように親しくなっていた」とあるように、利用者や職員との良好な人間関係が築けたことが、各評価項目の評価の高さに繋がったものと考えられる。

Lは、評価票の記述に「空いた時間も利用者の元へ行き、常に誰かと一緒に過ごしている姿が印象的でした」と記されている。このコメントから、受け身の姿勢で実習するのではなく、休憩時間を惜しんで利用者とのコミュニケーションをとり、心から関わりを持ちたいという自然な思いが伝わってくるようである。資格取得のために行かねばならない実習と捉えるのではなく、今日の前にいる利用者との関わりを持ちたいという気持ちで全面に出て、その思いが施設の指導者に伝わったのではないかと考えられる。

6. 本調査のまとめと今後の課題

本調査では、「評価票」(実習先による学生評価)及び「自己評価」(学生自身による評価・振り返り)に着目し、双方の“ズレ”から今後の実習指導の課題や改善すべき点を見出すことを目的とした。その結果、以下の5点を見いだした。

①「日誌の誤字・脱字」を減らす対策

誤字・脱字が減少し、改善が確実に認められる対策が必要である。

②評価項目における「日誌の内容」の追記

日誌に関する現行の評価項目では、提出期限と誤字・脱字に関する2項目であり、日誌の内容を評価する項目がない。そのため、記述欄に日誌の内容に関するコメントがなければ、内容についての評価はわからない状態である。よって、日誌の内容についての項目を追記する必要がある。

③評価項目における「前日までの反省を踏まえた関わり」の追記

限られた実習期間ではあるが、その中で積み重ねた学びや反省を翌日に活かすことで、利用児・者とのより良いコミュニケーションや関わりに繋がる。一日の学びや反省を意識することにより、日誌の記録や質問内容も深まることが期待される。

④実習内容について十分指導できる体制

実習に臨むにあたってのマナーや最低限のルール、実習を成立させるための基本的な事項の確認に力を注がざるを得ない状況である。実習内容について指導できる体制、時間の確保が必要である。

⑤個別指導が必要な学生に対する指導

「自己評価」「評価票」を十分に検討し、個別指導が必要な学生に対応する。

これらの課題や改善すべき点を実習指導の充実を図る手掛かりとし、具体的な実習内容の検討や評価項目の改訂に繋げていくことを今後の課題としたい。

引用文献・参考文献

久松尚美 野坂 敬. (2014).

児童養護施設における社会的養護の役割と課題の地域性. 宮崎学園短期大学紀要, 6, 63-33.

厚生労働省. (2009).

児童養護施設入所児童調査結果の概要. 厚生労働省雇用均等・児童家庭局.

宮崎県福祉保健部. (2013).

平成25年度版宮崎県の福祉と保健. 社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会.

佐々木昌代 久松尚美. (2014).

実習評価における“ズレ”の分析(Ⅱ)―保育所実習と施設実習における評価票と学生の自己評価について―. 全国保育士養成協議会第53回研究大会ポスター発表.

山田朋子・那須信樹・森田真紀子. (2011).

保育士の質向上につながる評価票ベースの継続的実習指導. 中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要, 43, 133-142.

